

ティブッルス第1巻第7歌の統一性

岩 崎 務

1

ティブッルスの第1巻第7歌は、詩人の友でありパトロンでもあるメッサッラが誕生日を迎えたのを機会として作られた詩である。当然誕生日を祝う詩なのであるが、そのテーマの統一性については大いに問題とされてきた。というのは、ひとつにはこういうことがある。メッサッラはガッリアでアクィーターニー族に対する戦争で勝利を収め、前27年9月に凱旋式を行う名誉を得たということがあるが、この歌の誕生日はその凱旋式の日からあまり隔たっていなかったらしく、ティブッルスは冒頭でメッサッラの誕生日をさすと思われる言葉 (hunc diem, 1) を用いるものの、すぐに3以下では彼の最近の勝利に言及し、その凱旋式の様子を思い返して描き、さらに軍事的・政治的な彼の功績を遠征地の名によって示している。誕生日のことについては、49以下詩の終結に至る部分になってやっと、この詩の歌われている場面がメッサッラの *genius natalis* の祝祭であることがはっきりする。従って、歌の種類として誕生日の祝歌 (*genethliacon*) と戦勝歌の両方の特徴をもつようであるが⁽¹⁾、果してティブッルスはこの詩に主としてどちらの性格を与えたのであろうか。

さらに、もうひとつのテーマが加えられている。メッサッラの戦功に関わる東西の土地や川の名が挙げられる部分の終わり (21以下) でナイル川のことを述べられているが、さらにナイル川の神であるオシーリス神も言及される。そして続く部分 (29-48) では、詩人はこの神が人間たちに与えた多大な恩恵について語りながら神を讃えている。ここでは詩はオシーリス讃歌の性格をもっていると言うことができる。

このようにこの詩は特定の時と場面のために作られたものでありながら、種類のテーマが組み合わされ、従来の詩の分類形式に従っては一様に捉えることの難しい詩となっている。そのため詩としての統一性が問題となるのであるが、誕生日と戦勝というテーマについては、一応ともにメッサッラを讃えるという共通点で結びつけることはできる⁽²⁾。しかし、オシーリス讃歌については、全体の行数のうち相当多くを占めるものでありながら、他の部分との関係が一

見したところ明白でないために、この詩の解釈を難しくする大きな問題となってきた。詩の主題からはそれた長い 'digression' であると見なされたこともしばしばあったが⁽³⁾、他の部分との対応関係を見出して主題の中に組み入れ、詩全体を統一的に解釈しようとする試みもなされ、様々な解釈が提示されてきた。

統一的な解釈をとる考え方は、大きくふたつに分かれるようである。一方は Gaisser が最初に示した見方で⁽⁴⁾、メッサッラとオシーリス神との間に同一性を認める。57-62 でメッサッラによる道路の修復⁽⁵⁾という事業が述べられているが、このようなメッサッラの公共の利益となる平和的で建設的な行為は、オシーリス讃歌において語られている神による農耕やブドウ栽培の発明(29-36)に対応し、人類の進歩に資する行為として共通性をもっている。また、詩全体にわたって両者を描いた表現に類似性が見られる。ともに冠を戴いているし (*uictrices lauros...gerentem, 7=frons redimita corymbis, 45*)、メッサッラの *genius* も花環をつける (*mollia sarta gerat, 52*)、ともにそれぞれの *pubes* の注目の的となる (*pubes Romana, 5=pubes...barbara, 27f.*)、ともに歌われる対象となり (*te canit, 27=te canet agricola, 61*)、農夫との関係はオシーリス神と同一視されるバックス神においても表される (*agricolae...pectora tristitiae dissoluenda dedit, 39f.*) などの対応である。Bright もメッサッラとオシーリス神の同一化がなされているとし⁽⁶⁾、ティブッルスはメッサッラが神性をもつ者であることを暗に意味しているとする。そしてその根拠として、両者ともに場合によっては荒々しい力を揮って、文明度の低い国の人々に文明という恵みを授けたという共通面が描かれているとみる。メッサッラの遂行する戦争も、オシーリス神の農作技術を教える行為も、その点で類似した活動である。従って、ティブッルスはメッサッラの誕生日そのものよりも戦勝を讃える方に重点を置いているということになる。Ball もメッサッラとオシーリス神の間に同一性とまではいかないものの対応関係を認めている⁽⁷⁾。しかし、Bright の見解とは違って、ティブッルスはオシーリス讃歌において自分のパトロンの非好戦的な面を強調していると考え、オシーリス讃歌を取り囲む前後の部分 — 東方での外交活動、道路の修復 — においても、メッサッラの活動は戦争との関連よりも平和的な性格をもつものとして表されているとする⁽⁸⁾。そしてティブッルスはこの詩においてメッサッラの誕生日を第一に考え、戦勝よりも重要であると見なしているとの見解をとっている⁽⁹⁾。

以上に紹介した説においては、それぞれ少し考え方の相違はあるものの、メ

ッサッタとオシーリス神は重ね合わせられ、従って、軍事的にしろ、平和的にしろ、メッサッタの功績をオシーリス神との関連で讃えるということが主眼となっているとこの詩は理解されている。

統一的な解釈をとるもう一方の考え方は、上に見たようなメッサッタとオシーリス神の同一化の考えに異議を唱えるものとして、Mutschlerによって提示された⁽¹⁰⁾。まず、すでにLevyによって、ティブッルスがオシーリス神の与える恩恵として挙げているものは彼の詩作の中心にあって原動力になっている事柄であり、オシーリス讃歌には、自己の精神生活の本質はこの神より賜ったことをメッサッタにほのめかそうとする詩人の意図が籠められている、という指摘がなされた⁽¹¹⁾。また、Klingnerは、内的な移動 (Bewegung) がこの詩の大きな特徴であり、1-28の表現においても、戦争から平和へ、緊張したローマの将軍という境遇から田園の牧歌的生活へ、あるいは、威厳から安楽へといった、ローマ的尺度からすれば高から低への動きが見られるが、このような極から極への移行はこの部分だけではなく詩全体に及んでいると述べている⁽¹²⁾。これらの指摘をもとに Mutschler は考察を進めて、11-20におけるガッリアの川および東方のキリキアやシュリアの土地の描写に用いられている語句には、平穏で静かで快いものと、大胆で荒々しく力強いものとの対立が認められ、これは「ティブッルスのなもの」と「メッサッタのなもの」の対照を表しているとする。そして、オシーリス讃歌の中の29-36では、神の人類への貢献を讃える中で、ティブッルスが第1巻の先行する詩においてしばしば希求した理想的な生活像⁽¹³⁾が浮き出るのであり、田園生活の創始者であるオシーリス神は「ティブッルスの神」として現れている。37-42のワインにおいて働く力としてのオシーリス=バックス神の賛美においては、ワインと踊りと歌の神としてバックス神はまた歌い手ティブッルスの神でもあることが示され、そのような神の力が農夫にだけではなく(39-40)、「ティブッルスの世界」と対立する先に歌われた世界、即ち、人間たち同志の対決、敗北と勝利の両面が特徴であるような世界で苦しむ人間にもその効果を発揮している(41-42)。さらに、43-48ではオシーリス神の新たなそしてより明らかな「ティブッルスの」性格が現れ、49-54においてメッサッタの誕生日の祝祭の場へのオシーリス神の顕現が願われることによって、ティブッルスの生活領域を支配する神の力がメッサッタの異なる性質の生活領域にも発揮されることになる。そして最後の55-64では、道路の修復が言及されることによって、メッサッタの貢献の日常的、平和的な面が現れ、それに対する感謝を歌う農夫が描かれる。こうして、今度は「メッ

サツラ的な」大きな世界の側からの農夫の小さな世界への配慮と働きかけがあることが示されて、「ティブッルス的存在」と「メッサツラ的存在」はある点では対立しあうものではなく、両世界に完全に共生し得る可能性のあることを見せて詩は終わっている。以上が Mutschler の解釈の大筋であり、メッサツラとオシーリス神との同一化ではなく、むしろ、メッサツラを歌うティブッルス自身と神との強いつながりが示されていると考え、オシーリス讃歌を導入することによって、メッサツラとティブッルスのそれぞれの世界と価値観の対置が明確にされ、メッサツラとオシーリス神を讃える中で両世界の関係が大きなテーマになっているとの見方をしている。

以上のように、統一的な解釈は、オシーリス神をメッサツラと結びつけるか、それとも詩人の神とするかによって、大きく2つに分かれている。本稿もこの詩に統一性を認めようとするが、オシーリス神については、メッサツラと詩人のどちらにも関わる神として歌われている、即ち両説の中間的な見方をとるべきものとする。後者の説、とくに Mutschler が主張する、オシーリス讃歌においては「ティブッルスの世界」が提示され「メッサツラの世界」との関係がこの詩のテーマとなっているという考え方はたいへん示唆に富む。確かにこの部分では、ティブッルスの精神世界、そしてそれに基づいた抒情詩人としての彼の歌い方の本質が表されていると思われる。しかしながら、オシーリス神そのものについては、一方的にティブッルスだけに関連するのではなく、やはり前者の説が示すように、「恵みを授ける者」という点でメッサツラと共通性を持ち、語句などの対応によってそれが明らかにされていることも否めないように思われる。メッサツラは、全くの同一視ということではないが神とその一面の性格で関連づけられて、それによってその賞讃の度合いを詩人によって高められている。

以下の小論においては、オシーリス神にこのような両面的な要素を見る観点から、とくにオシーリス讃歌を中心として改めてこの詩の解釈を行い、その統一性について考えてみたい。

2

すでに指摘されているところでもあるが⁽¹⁴⁾、この詩の全体にわたって、多くは讃えるという意味で「歌う」とか「語る」という動詞が、また「歌」という意味の名詞が繰り返し使われていて (1 cecinere, 13 canam, 17 referam,

23 dicere, 27 canit, 37 cantu, 44 cantus, 47 cantu, 57 nec taceat, 61 canet), これらの言葉が詩の各部分を結びつける働きをしている。讃え方、あるいはもっと広く歌い方ということが一つの統一的なテーマとなっていることを窺わせる。そしてとくに動詞は、この詩の思考の流れにおいてポイントをなす言葉となって、それぞれ転換をもたらしているように思われる。これらの言葉に注目して詩の流れの変化を追ってみる。まずはメッサラの誕生日をさして次のように始まっている。

Hunc cecinere diem Parcae fatalia nentes
stamina, non ulli dissoluenda deo:

この日をパルカエは歌った、どの神にも解きほぐすことのできない運命の糸を紡ぎながら。 (1-2)

「この日」は運命の女神たちがかつて「歌い」運命づけた日である。しかし、その日がメッサラの誕生日であるとははっきり述べられずに、次の 3-4 ではその日が将来的にはアクィーターニー族を征伐する日になるであろうことも運命づけられたと述べられ、最近にあったメッサラによる戦勝のことが言及される。そして、その凱旋式における triumphator メッサラの栄ある姿が描写される 5-8 まで、この詩の最初の部分には叙事詩的な高い調子を感じとれる⁽¹⁵⁾。誕生日というよりは戦勝のことのほうが語られている内容の点でもそうであるし、hunc のアナフォラ (1, 3) のような形式もそれを強めている。また、1-2 の語句はカトゥッルス第64歌の carmina diuino cecinerunt pectore Parcae (383) との類似が指摘され⁽¹⁶⁾、このカトゥッルスの歌はペーレウスとテティスの結婚をテーマにしたエピュッリオンであり、英雄アキッレースの誕生のことも言及されている。

このように叙事詩的な調子でメッサラの戦勝が讃えられているのだが、この部分の語りはまるで叙事詩の伝統的な作者の態度をとるかのよう非人称的である。ティブッルスではなく、過去にパルカエが歌い運命づけたことがその通りに起こった (euenere, 5) のであり、それをローマの人々が見た (pubes Romana... uidit, 5f.). 先に示したようにあとの pubes miratur... barbara (27f.) との対応があるのだが、uidit と miratur との違いがあり⁽¹⁷⁾、後者はすぐ前の te canit に続き「歌い崇める」を意味するのに対して、ここでは人々はただ「見ている」だけで歌がない。とくにティブッルスの一人称の歌が

始まってはいない。しかし、メッサッラが戦いを行った場に詩人はいなかったわけではない。

non sine me est tibi partus honos: Tarbella Pyrene
testis et Oceani litora Santonici,

わたしもいてあなたに誉れが生まれた。証人はタルベッリー族の地のピューレーネー山、そしてまたサントニー族の大洋の岸も⁽¹⁸⁾, (9-10)

続く 11-12 でも証人としてガッリアの各地の川の名が挙げられる。しかし、ここでもまだ、testis のアナフォラ (10, 11) もあり、列挙される地名の列は凱旋パレードの延長のようであり⁽¹⁹⁾、讃歌の調子が高い。やはり「私」の歌はまだ展開しないのだが、「私」が示されたことにつながって次の言葉によって調子の変化がもたらされる。

an te, Cydne, canam, tacitis qui leniter undis
caeruleus placidis per uada serpis aquis,

それともキュドヌスよ、あなたをわたしは歌おうか、波音たてず穏やかに、青くも静かな水で川床をはうあなたを, (13-14)

ここでメッサッラのかつての遠征地あるいは勤務地であった東方の土地に目は転じられる。an te, Cydne は直前のガッリアの川に代えて言われるのだが、7の at te ... Messalla に対置されるものでもあり、対象および語りの調子の変化が生じる。このキュドヌス川の描写には過剰なまでの多くの形容語句が使われ、前のガッリアの川の名の列挙とは対照的である。以下に続く東方の山や町の描写にもそれぞれ2行ずつがあてられる。対象に向かう詩人の態度が変わり、対象を自分の言葉で歌い上げようとする調子になり、歌われるものは単にメッサッラの軍功やティブッルス随伴の証明ではなくなっていく。Klingner はここで調子が抒情的なものに移行していくと述べているが⁽²⁰⁾、まさに「私」の歌 (canam, 13) が始まろうとする。そしてその詩人の態度は 17の最初の一人称の言葉によって引き継がれていく。

quid referam ut uolitat crebras intacta per urbes
alba Palaestino sancta columba Syro,

わたしはどう語ろうか、賑わう町々を、パラエスティーナのシュリア人にとって聖なる白い鳩が、傷を受けずに飛びゆくさまを、 (17-18)

Mutschler は、少なくとも 13以下では歌い手が自分の歌の正しい対象を探し求めていることが示されている、と指摘している⁽²¹⁾。確かにここでは詩人の視点の変化というものも感じさせられる。13-14では地上を流れる川が、15-16では雲に聳える山が、17-18では空を飛ぶ鳩が、19-20では海面を進む帆船が描かれ、空間的な移動を示している。表現内容のほうでも、自然の風物から人間の営みへと徐々に向かう動きがあるように思われる。まず、タウルス山の養うキリキア人、そしてシュリア人の賑わう町々が言及され、さらにテュロスの町が、ひしめきあう高い建築物と活発な商業活動、海を行きかう帆船を彷彿とさせるように描き出される⁽²²⁾。人間たちの暮らしが少しずつ大きく現れてきて、その細かいところまで見えてくるようである。

このような動きの行きつく最後に、再び最初にあった川の言及に戻る形で、ニールス川が23-24で対象として挙げられる。しかし、やはりここで歌われるニールス川は、夏の暑さで干からびた畑に水をあふれさせてくれる川であり、農業という根本的な人間の営みに結びついた場として描かれる。そして、メッサッラがローマの人々に利益をもたらした人として讃えられる対象であったように、再びここで人間たちに恵みを与えるがために讃えられるべき対象 (te canit, 27)としてニールス川が、そしてこの川の神オシーリスが現れてくる。しかしながら、ここまで見てきたように、ティブッルス「私」の歌の対象を捜し求める動きを経た上で歌われるニールス川であるから、メッサッラとは性格を異にする面もあるし、歌われ方も同じではない。従って、ここでも前の13、17に引き続いて、詩人の一人称の動詞がニールス川に対して使われている (possim ... dicere, 23)。そして、広く人間たちに恩恵を与えてきたオシーリス神の讃歌がより大きな形で導入されようとするのだが、讃歌になると詩人の一人称は消える。

te canit atque suum pubes miratur Osirim

barbara, Memphiten plangere docta bouem.

異邦の人々があなたを歌い、自分たちのオシーリスを崇める、メンピスの牛を悼むように教えられた人々が。 (27-28)

ティブッルス「私」の歌は「異邦の人々」の歌に溶け込んで1つになる⁽²³⁾。

3

オシーリス讃歌は、まず 29-36が1つのグループを作っている。その前半の 29-32で耕作と果樹栽培が、後半の 33-36でブドウ栽培が言及され、全体としてオシーリス神が農作技術の発案・教授者、農耕文化の創始者として歌われ、人間たちの生活へのその貢献が讃えられている。前半はこのように歌われている。

primus aratra manu sollerti fecit Osiris
et teneram ferro sollicitavit humum,
primus inexpertae commisit semina terrae
pomaque non notis legit ab arboribus.

オシーリスが初めて巧みな手で鋤を作り、柔らかい土を揺り起こした、初めて種を試されたことのない土地に委ね、知られぬ樹々から果実を摘みとった。(29-32)

ここの語句の用いられ方で気づくのは、先の2行で「柔らかい土を鋤の刃で起こす」という語句において硬軟の組み合わせ (teneram ferro) が示され、あとの2行で実りの収穫が述べられることである。このようなパターンが、ブドウ栽培の仕方を説明する33-36でも認められる。先の2行では、「柔らかいブドウのつるを支えの棒に結ぶ (teneram palis adiungere uitem)」, 「緑の葉を硬い鎌で切り落とす (uiridem dura caedere falce comam)」と言われ、やはり、硬(dura)と軟(teneram, uiridem)の組み合わせがあり⁽²⁴⁾、あとの2行では熟したブドウとワインという実りが示される。このように同じパターンが繰り返されている。それゆえ、ここではオシーリス神が人間たちに与えた教えが述べられているのだが、その本質は「固いもの」と「柔らかいもの」を結び合わせて実りが得られるということにあることを、ティブッルスは暗に示しているのではなかろうか。

この部分の続きの37-38では、オシーリス神のもたらした恵みの1つであるそのワインが、さらに人間たちに歌と踊りを教えたと言られる。その上で、オシーリス神は今度は、ブドウの神と同一視されるローマのバックス神の名にお

いて讃えられる。

Bacchus et agricolae magno confecta labore
pectora tristitiae dissoluenda dedit:

バックスは農夫に、大きな労苦に疲れた胸を悲しみから解放するように囃
った。(39-40)

バックスの名のアナフォラによって導かれる次の2行も苦しみを癒す神の力を
歌い上げている。ところで、このバックス神はワインの神として、37-38で言
われたことからすれば、歌と踊りの神でもある⁽²⁵⁾。即ち、オシーリス神は、
バックスという名で限定されるような特質において、抒情詩人ティブッルスと
強く結びつく。そして次には、歌と踊りを中心とした祝祭にふさわしい神とし
て、再びオシーリスの名が呼びかけられる。

non tibi sunt tristes curae nec luctus, Osiri,
sed chorus et cantus et leuis aptus amor,

あなたには、憂鬱な心配や嘆きではなく、オシーリスよ、踊りと歌と軽い
恋がふさわしい。(43-44)

このようにオシーリス讃歌の後半部は、37-38の移行部によって導かれ、また
限定され、ティブッルスの生活領域とより大きく関わる内容のもの、さらに言
えば、詩人ティブッルスの歌い方を暗示する(37 cantu, 44 cantus, 47 cantu)
ものになっているように思われる。

改めてこの後半部を見てみると、その中の前半ともいえる39-43で、とくに
バックス神の力を歌うために「労苦」のモチーフが用いられている(39 labore,
40 tristitiae, 41 adflictis, 43 tristes curae, luctus)。そして42では人
間に苦しみをもたらすものの1つ、あるいは苦しみを象徴するものとして「固
い足かせ(dura compede)」が挙げられている。従って、ここの「労苦」のモチ
ーフは、オシーリス讃歌前半部で対の一方として示された「固いもの」に対応
するのではないだろうか。実際、農夫の労苦はサートゥルヌスの支配する黄金
時代にはなかったことであり、ユピテルの時代になって土に「硬い」鋤をあ
てることを人間が教えられたゆえに生じたのである⁽²⁶⁾。また、「硬い」鋤や
鎌による行為を示す動詞 sollicitauit(30) や caedere(34) は、不安や死を

含意するものであった⁽²⁷⁾。そして「固い足かせ」は、メッサラの凱旋式で引かれる捕虜たち(6)を想起させる。「硬い」ものは、戦勝や田園の実りをもたらすはするが、また一面では労苦と悲しみを伴うものであり、その象徴ともなる。

一方、オシーリス讃歌後半部の後半(44-48)では、*teneros*(46)が前半部の対のもう一方の「柔らかいもの」に呼応し、*leuis*(44, 48), *dulcis*(47)といった語もこれに連なるものであろう。歌や踊り、始原的な形の芸術が言われるこの部分において、これらの形容詞はティブッルス之歌の性格を表すものであろう。カトゥッルスは第35歌で友人のカエキリウスをさして「柔らかい詩人に(*poetae tenero*, 1)」と呼んでいる。一般にこれは恋愛詩人を意味していると考えられ⁽²⁸⁾、のちのオウィディウスは *tener* を好んで使い、たとえば『恋愛術』第3巻には「柔らかいプロペルティウスの歌(*teneri carmen Properti*, 333)」という言葉がある。前半部の「柔らかいもの」に対応して、ここではティブッルス之の柔らかい歌、文学が示されている。しかし、柔らかい歌はただ甘美なだけではない。バックスのもたらすワインが「労苦」を癒すように⁽²⁹⁾、歌がワインから生まれたものであれば、歌もそうでなければならないし、そのためには「労苦」を知っていなければならない⁽³⁰⁾。実際、恋愛詩は恋の喜びだけでなく、恋の苦しみを歌うことが常である。39の *labor* はこの恋の苦しみを想起させる言葉でもあろう。恋愛詩においては、恋を得ようとするために耐える苦痛がしばしば *labor* という言葉によって表される⁽³¹⁾。

オシーリス讃歌の前半部と後半部をみてきたが、全体にわたって、「硬」と「軟」のそれぞれの範疇にはいるようなものの対比と結びつきが表されていた。農作業に用いる鉄器が象徴するような、そしてメッサラの戦いも含まれるような「硬さ」は、確かに収穫や勝利をもたらすはするが、その陰には「労苦」が存在する。そのような「硬さ」には日常的な「労苦」を知りそれを癒すような「柔らかさ」が結びつかなければならない。そしてティブッルス之歌はそのような「柔らかさ」に属するものである。メッサラの人々に対する貢献にもティブッルス之の「柔らかい」歌が合わせられなければ、真の意義は示され得ないだろう。このようなことがオシーリス讃歌においては暗示されているのではないだろうか。そしてオシーリスは、「硬さ」を用いる術を人間に教え、他方では「柔らかさ」の源泉を与えた神として讃えられている。

さて、詩は、冒頭で言及されながらも、詩人の思いがそこから移り動いて行ったメッサラの誕生日の祝祭の場へと戻る。そしてその場に先に歌われたオシーリス神の来臨が願われる。

huc ades et Genium ludis centumque choreis

concelebra et multo tempora funde mero:

ここに来たり給え、そして100の競技と踊りとともにゲニウスを讃え、こめかみに多くの酒を注ぎ給え。(49-50)

酒と踊りはオシーリス讃歌で歌われたバックス神の与える恵みである。そして、オシーリス神の来臨を得たとき、ゲニウスがつける花環は、7の凱旋式のときのメッサラの冠に対応するのではあるが、ここでは「柔らかい(mollia, 52)」という形容詞がつく⁽³²⁾。またティブルスがゲニウスに捧げるのは「甘い」菓子(dulcia, 54)である。これらの言葉はオシーリス讃歌のとくに後半部につながるものであり、従って、オシーリス神の力を受けたティブルスの存在領域でメッサラのゲニウスが讃えられ、歌われる⁽³³⁾ことを示している。

この移行部的な49-54を経た上で、55以下、詩の最後の部分では誕生日の祈願が述べられるのだが、その中で改めてメッサラの功績が歌われる。詩の初めで讃えられた戦勝といったような偉業を想起させる言葉も使われるが(facta parentis, 55)⁽³⁴⁾、ここではメッサラが修復を行った道路(monumenta viae, 57)という功績が挙げられる。その道路と、そこを都会から田舎へとたどる農夫とが次のように語られる。

namque opibus congesta tuis hic glarea dura

sternitur, hic apta iungitur arte silex.

te canet agricola, a magna cum uenerit urbe

serus, inoffensum rettuleritque pedem.

というのは、君の富で集められた固い砂利がここに敷かれ、ここに適した技術で堅固な敷石が重ねられる。農夫はあなたを歌うだろう、大きな都から出て夜遅く、つまずかずに歩みを戻したときに。(59-62)

この道については、「固い砂利(*glarea dura*)」や「堅固な敷石(*silex*)」という言葉が各行の最後におかれて、その固さが強調されている。それはオシーリス讃歌で示された「固さ」に応じるものである。道は堅固でなければ人の役には立たない。しかし、やはり道も、ユピテルの時代には、富に引かれる商人たちを、戦勝を求める兵士たちを、苦難の旅に運ぶという面を持つ。そしてその一面は、ティブッルスが繰り返し表明する彼の望まない生き方の象徴でもある⁽³⁵⁾。それゆえ、ここでは農夫の日常の労苦を少なくするところに道の価値が見出され、そこでメッサッラは讃えられている。そのとき農夫の賞讃の声は自然と口をついて出るのであり、それにティブッルスの歌は溶け合っている。それも「軟らかい」歌い方で。

以上の通りティブッルスの第1巻第7歌を考えてきたが、この詩はメッサッラの誕生日の祝祭を機会として、メッサッラを讃えるためのものであった。しかし、彼の戦勝凱旋式が近い時期に行われていたがために、それに触れることからこの詩は始まった。そこでは「硬い」歌い方でメッサッラは歌われた。しかし、絶妙の移動によって詩はオシーリス讃歌へと至り、この神の授ける恵みの、メッサッラにも関わる、ティブッルスにも関わる、「硬軟」の両面性が示された。そしてそのうえで最後に、もう一度、ティブッルスの領域において「柔らかい」歌い方でメッサッラは讃えられた。そのような形をこの詩はもっているのではないだろうか。

注

本文中のテキストは、J. P. Postgate 校訂の OCT 版(2nd ed. repr. 1982)に従った。

(1) *genethliacon* としては、ティブッルス 2.2, ホラティウス『カルミナ』4.11, プロペルティウス 3.10, ウェルギリウス『牧歌』4など、戦勝歌としてはホラティウス『カルミナ』1.37; 3.14 などがある。

(2) K. Galinsky, *The Triumph Theme in the Augustan Elegy*, WS 82(1969), 78 は、この詩には、凱旋式という公的な祝祭と誕生日という私的な祝祭を組み合わせる構想があるとする。

(3) たとえば, K. F. Smith, *The Elegies of Albius Tibullus*, New York 1913, repr. Darmstadt, 1985, 333; M. Schuster, *Tibullstudien*, Wien 1930, 20 など.

(4) J. H. Gaisser, *Tibullus 1.7: A Tribute to Messalla*, CPh 66(1971), 227f.

(5) 内戦後アウグストゥスは自らと将軍たちに道路修復を割り当てた。メッサッラはラティーナ街道の一部を担当した。Cf. M. C. J. Putnam, *Tibullus: A Commentary*, Norman 1973, 125. 詳しくは, G. MacCracken, *Tibullus, Messalla, and the Via Latina*, AJPh 53(1932), 344-52.

(6) D. F. Bright, *Haec mihi fingebam: Tibullus in his World*, Leiden 1978, 56-61.

(7) R. J. Ball, *Tibullus the Elegist*, Göttingen 1983, 115f.

(8) Ibid., 112, 119.

(9) Ibid., 120f.

(10) F. -H. Mutschler, *Die poetische Kunst Tibulls*, Frankfurt am Main 1985, 110-26.

(11) F. Levy, *Der Geburtstag des Freundes. Eine Studie zu Tibull 1.7*, SIFC 7(1929), 101-11. Cf. Mutschler, op. cit., 110f.

(12) F. Klingner, *Tibulls Elegie auf den Geburtstag des Messalla*, in: *Römische Geisteswelt*, München 1956, 412-25.

(13) たとえば, 1. 1. 7-10; 1. 5. 21-30 で言われるような, 田舎での質素で平和な生活。Cf. Mutschler, op. cit., 118.

(14) Ball, op. cit., 114. とくにオシーリス讃歌の部分に多く, 讃歌の高められた調子を作る1つの要素になっているとする。

(15) Ibid., 108f.

(16) Ibid., 50; Gaisser, art. cit., 223; J. P. Elder, *Tibullus, Ennius, and the Blue Loire*, TAPA 96(1965), 104. Elderはさらに, *flauī caerula* (12)にエンニウス『年代記』中の語句との類似を見る。

(17) Mutschler, op. cit., 117はこの対比のほうを重視する。

(18) *non sine me* はメッサッラに対して横柄であるとか, ティブッルスが他の詩で表明している戦争や苦しい旅を厭う気持ちに矛盾するとかの理由で, *non sine Marte ibi* などの読みも提案された。Cf. Ball, op. cit., 109f. しかし, この語句は単にティブッルスがメッサッラの遠征に同行したこと, 戦勝

の目撃者であったことを示すだけと解してよいのではないか。 Cf. Schuster, *op. cit.*, 19 n. 1; Elder, *art. cit.*, 104; Bright, *op. cit.*, 61f., 65.

(19) 凱旋式では山や川の模型図が運ばれることがあったが、それを思わせるような列挙である。 Cf. R. G. M. Nisbet & M. Hubbard, *A Commentary on Horace Odes Book III*, Oxford, 1978, 149f.

(20) Klingner, *op. cit.*, 422.

(21) Mutschler, *op. cit.*, 116.

(22) Cf. Smith, *op. cit.*, *ad loc.*

(23) Mutschler, *op. cit.*, 118.

(24) Smith, *op. cit.*, *ad loc.* は, *uiridem* について, *dura*との並置によって「柔らかい」という意味も合わせもつと指摘する。逆に, *palis* にも *teneram*との並置によって「堅さ」を感じとれるだろう。

(25) Cf. Mutschler, *op. cit.*, 119.

(26) 1. 3. 35-50 で黄金時代とユピテルの時代の対比がなされている。帆船もユピテルの時代の発明として挙げられており(37f.), 1. 7において, 20で言われる帆船はオシーリス神のこの「固いもの」を用意していたとも見られる。

(27) Putnam, *op. cit.*, *ad loc.* Cf. Bright, *op. cit.*, 59.

(28) C. J. Fordyce, *Catullus*, Oxford 1973, *ad loc.* 中山恒夫, 「カトウルススの詩論 — アレクサンドリア派の文学理論とローマ的美学 — 」, 大阪大学『言語文化研究』8(1982) は, ここの *tener* が恋愛詩をさしていることには否定的であるが, 「ラテン文学の主流を占めてきた硬派の文学に対して, 軟文学を擁護した」言葉であると述べる。

(29) 21-22 の乾いた畑に水をあふれさせるニールス川の描写は, このワインによる「労苦」の癒しに予め呼応するものであった。

(30) 27-28 の表現も, 嘆きを知る人々がオシーリス神を歌うとも解されるわけで, 対応関係をもっていると言ってもよい。聖牛アーピスの死に際しての国民の追悼については, Smith, *op. cit.*, *ad loc.*

(31) たとえば, プロペルティウス 1. 6. 23, ティブッルス 1. 2. 31. Cf. S. Lilja, *The Roman Elegist's Attitude to Women*, Helsinki 1965, 80-1.

(32) Cf. Mutschler, *op. cit.*, 122.

(33) 51の詩句と54の *Mopsopio* についてはカッリマコス of 語句との関連が指摘されている。とくに前者との類似が言われる断片 7, 12 Pf. は, その序に

においてカッリマコスが自分の文学観を示していることで有名な『起源物語』からの断片であり、ティブッルスの歌い方をほのめかしているのではないだろうか。 Cf. Gaisser, art.cit., 226; Ball, op.cit., 122ff.

(34) Putnam, op.cit., ad.loc. はウェルギリウス『牧歌』4.26で同じ語句が英雄的行為をさして使われていることを指摘する。

(35) たとえば, 1.1.1-6, 51-2; 1.3.49-50.